二〇一〇年度　大阪星光学院中学校　入学試験問題

国語　その1

さくらの個別指導（さくら教育研究所）

一、次の文章をよく読んで後の問いに答えなさい。

夕方になって、ぼくが自分の部屋でマンガを読んでいたときのことだ。お母さんの「しっ、しっ」という恐ろしくも鋭い声に何事かと出て行くと、①縁側にあのねこがいた。取り込んだばかりの洗濯物の山の上に、どっしりと坐っている。

「ほら、サトル、見てないで追っ払ってよ」

離れたところから、お母さんが命令した。お母さんはねこが大の苦手なのだ。

「ほら、早く。洗濯物に毛が散っちゃう。ああ、ヤダヤダ早く！」

お母さんが本気でいやがっているみたいだったので、しかたなくぼくは爪先でねこをぐりぐりと押した。

「ほら、出てけよ！　お母さんが怒ってるぞ」

お母さんが怒ると怖いんだぞ。とばっちりがぼくにまで来るんだぞ。

ねこは恨めしそうな顔をしたかと思うと、「つたくしかたねーな。じゃーどいてやるよ」というようなものすごく偉そうな態度で、庭にどさりと飛び降りた。毛皮にaツツまれた脂肪がぶるぶるふるえて、細かい毛がぷわっと飛び散った。

お母さんは②親のカタキみたいに洗濯物をはたきまくり、「まったくもー！　洗い直さなきゃ」とかつぶやきながら自分のパンツやTシャツだけより分けて洗濯機に放り込んだ。

それからもねこはちょくちょく現れては、柱で爪を研いだり、食卓の上で昼寝したり、せっかく咲いた花をその体重で圧死させたりと、「おまえぜったいわざとやってんだろ」といいたくなるようなことばかりしていた。お母さんはそのたびに「きーっ」となりながら、「まったくなんで居着いちゃったのかしら。サトル、あんたまさかあのねこに餌なんかあげてないでしょうね」とぼくを疑るように見たりした。

「あげてないよー」とぼくは口をとがらせたけれど、本当のところは時々食パンだとかイリコだとかをこっそりやっていた。③あちゃーと思ったのは、そのイリコが混じったゲロをお母さんが発見してしまったときだ。よりによって、客間の、うちでは一番上等なじゅうたんの上で。

台所だって玄関だって板の間だってあるのに、なんでわざわざ客間でやるかなあ。やっぱり、わざとやっているとしか思えない。

この一件で、お母さんはすっかりヒステリーを起こしてしまった。

「そうだわ。いつだったか、せっかくb生えたお花の芽を台なしにしたのも、きっとあのねこよ」

何の証拠もないくせに、そんな昔のことまで引っ張り出してそう決めつけたりする。いや、当たっているんだけどさ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

とにかく母は強し、だ。

いったんお母さん火山が爆発しちゃうと、お父さんとぼくとはおろおろといいなりになるしかない。

「あんなねこ、どっか遠くに捨ててきちゃって！」

という命令が下されて、お父さんとぼくの捕獲大作戦が始まった。

それについて、多くは語るまい。壮絶なバトルが繰り広げられた、とだけいっておこう。

その日の夕方、ボロボロになったお父さんとぼくは、自転車で三十分くらいのところにある河原目指して、国道をひた走っていた。お父さんの荷台には、大きな段ボール箱がくくりつけられている。その中からは、ぎゃうぎゃうとすさまじい声が響き通しで、道行く人たちは「ライオンの子供でも入っているんじゃないか」という目でぼくたちを見ていた。

「ねえ、お巡りさんに見つかったらどうしよう」

やっとの思いで河原について、二人で段ボール箱を運んでいるとき、ぼくはこそっとお父さんに尋ねた。お父さんは「人聞きの悪いこというなあ」とぼやくようにいった。

「だってさ、なんか、死体を捨てに行くみたいじゃない」

そうぼくは続けたが、実際は死体どころか、ぎゃおぎゃおどったんばったんと元気なものだ。お父さんはヨロヨロ歩きながらため息をついた。

「ロクなことをいわんやっちゃな」

お父さんはそういうけど、④ぼくの感じているやましさ加減は似たようなものだったのだ。

川岸にたどり着き、イチ、ニノ、サンでふたを開けると、弾丸みたいな勢いであのねこが飛び出して、そのままだっとどこまでも走っていってしまった。あの身体でよくもまあ、と感心するようなスピードで。

やましくはあったけれども、何事かを成し遂げたcタッセイ感はあったし、男同士の絆も深まったんじゃないかと思う。

とにかくその夜、お父さんとぼくは、お母さんが作ったカレーを何杯もお代わりした。

それからちょうど一週間後の日曜日のことだ。いきなり「キャー」というdヒメイが聞こえて、お父さんとぼくは何だ何だと声の聞こえた客間に走った。

お客さん用ソファの上に、のっしりと寝ころぶあのねこがいた。

その2

（個別指導（さなる教育研究所）

くとお父さんとは、あんぐりと口を開けて顔を見合わせた。こっちだって「ぎゃー」と叫びたいぐらいだ。ほら、サスペンドラマとかでよくあるじゃない？　殺したと思っていた人が実は生きていて、いきなり犯人の前に現れるっていうの。まあ「ロクなことをいわんやっちゃな」っていわれそうだけど。

っかし、しぶといやつ。実行犯のぼくらではなくて、犯行を命じた^{e}チョウホンニンに真っ先に姿を見せるあたり、「やっぱりわざとやってるだろ」という気がする。

すさらに母さんは何もいわず、ふらふらと台所に行ってしまった。今見たことは「なかったもの」にするつもりかもしれない。

かり愉快になったぼくは、がああ寝ているねこを見て、「あれ？」と思った。

ねこの首に、赤い首輪がついていた。

「ねえねえ」ぼくはまだ呆然としているお父さんの腕を引っぱった。「首輪しているよ、あのねこ」

「本当だ」お父さんも驚いたみたいだった。「前はしてなかったよな、あんなもの」

「してなかったよ。誰かに飼ってもらえたのかな」

「そうだろうな。誰かの飼いねこってことになると……」お父さんはにやっと笑った。

「勝手に捨ててきたりしちゃ、いけないよなあ、そりゃ」

せっかくの日曜日が、また^{f}フモウな闘いでつぶれるかと思って、ぞっとしていたんだろう。

ぼくだってもう二度といやだ、あんなこと。

ぼくはもう一度、ねこをしげしげと見やった。見れば見るほど、やっぱり^{g}不細工でデブだった。お父さんも同じことを思ったのか、「こんなドラねこを飼うなんて、ずいぶんと⑤キトクな人もいるもんだなあ」とつぶやいて、テレビの続きを見るために居間に戻っていった。

一人残されたぼくは、ねこの首輪を見ているうちに、いいことを思いついた。ノートを小さく切って、鉛筆でこう書き付けたのだ。

このねこのなまえはなんですか？

紙を細長く折りたたみ、首輪が二重になったところに押し込んでおいた。

ねこは逃げもせず、ごろりと寝返りをしただけだった。

何日かたって、またあのねこがやってきたとき、とっつかまえて首輪を調べてみた。すると、ぼくが入れたものとは明らかに違う紙がはさまっている。

どきどきしながら紙を開いた。するとそこにはただひと言、こう書かれていた。

モノレールねこ

ぼくがフランス人だったら「ブラボー」と叫ぶところだった。

なんという素晴らしいセンス！　どうしてモノレールかなんて、わざわざ説明してもらうまでもない。塀の上に坐って、両脇から垂れた脂肪でがっちり塀をつかんでいる姿は、まさに「モノレール」以外の何物でもないじゃないか？

すっかり感銘を受けたぼくは、もうひとつ素朴な疑問を書いた紙を首輪にはさみこんだ。

どうしてこのねこをかおうと思いましたか？

数日後、返事が来た。

くびわはつけたけど、うちでかっているわけではありません。ノラだと、保健所につれて行かれることがあるってきいたから、おこづかいでくびわをかってあげたのです。女の子だから、赤いくびわ。

ぼくは感じ入ってしまった。なるほど、ノラだと箱に詰められて河原に捨てられたりもする。首輪さえつけていれば、近所の誰かが飼っているんだと思って、誰も手出しできなくなる。

こいつひょっとして、シャーロック・ホームズみたいに頭のいいやつかも。

⑥ぼくの興味はいつの間にか、モノレールねこから手紙を書いた相手の方に移っていた。

ぼくはまたもやノートを切り取り、手紙を書いた。

いいわすれていたけど、ぼくは谷山小学校の五年生です。きみはどこの小学校ですか？

もしかして、同じ谷山小学校だったりして

サトル

手紙の文字からいって、相手も小学生だとは思っていた。あのかしこさからして、五年か六年だろう。だったら同じクラスの誰かってことも、ありえるわけだ。

次の日、どきどきしながらクラスの連中を見回したけど、ぼくの熱い視線に応えるやつは誰もいなかった。

（加納朋子『モノレールねこ』文春文庫　より）

問1　═══線部 a～g のカタカナを漢字に直し、漢字にはその読みをひらがなで書きなさい。

問2　――線部①の「あのねこ」とはどんなねこですか。初めから＊＊＊の部分までででわかる範囲で、七十字以内で書きなさい。（句読点も一字に数えます）

問4 ――線部②「親のカタキみたいに」という比喩の内容として適当なものを次の中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 怒りの気持ちをおさえられず体をふるわせて
イ 自分が腹を立てているとみんなにわからせるために
ウ 憎しみがこもっていると思えるほどはげしく
エ 悲しみとくやしさのあまり力が入らずに
オ だれもが同情できるくらいあからさまに

問5 ――線部③で、ぼくが「あちゃーと思った」のはなぜですか。百二十字以内で書きなさい。（句読点も一字に数えます）

問6 ――線部④「ぼくの感じているやましさ加減」とはどういう意味ですか。五十字以内で書きなさい。（句読点も一字に数えます）

問7 ――線部⑤の「キトク」とはどんな意味ですか。適当なものを次の中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 病気が重く生命にかかわること。
イ 心がけがよく感心なこと。
ウ すでに手に入れていること。
エ だれも近づかないほど変わっていること。
オ まじめでかげひなたのないこと。

問8 ――線部⑥「ぼくの興味」が「ねこ」から「手紙を書いた相手」に移っていったのはどうしてですか。八十字以内で書きなさい。（句読点も一字に数えます）

その3

二、次の文章をよく読んで後の問いに答えなさい。

人間が生きていく、ということは、そのつど何かを選び・それ以外を捨てていく、ということである。それに比べると、動物の生は、かなり単純である。腹をすかした蛙は、餌がaシャを横切ったなら、とっさに舌をのばして捕食する。餌の存在が認知されたら、とっさに舌がのびる。これは、進化の過程のなかで蛙の体にインストールされたプログラムによる自動的な動きであって、そこには選択の余地はない。

たしかに、人間の生にも、そうした自動的な行動はありうる。餌が目に入ったら、いいも悪いもなく自動的に手がのびて、とにかく口に入れる。強制収容所の囚人や、密林を敗走する敗残兵が、飢餓の極限にまで追いつめられたときには、こうした自動的な行動が生じる。しかし幸いなことに、それが人間のbジョウタイなのではない。

腹をすかした人間が、食べ物を目にしたとき、まず生じるのは、複数の選択肢の集合である。すぐ全部を食べる、あるいは半分食べて残りを自分のためにとっておく、あるいは残りを他の人にあげる。食べるにしても、そのまま食べる、あるいは煮て、あるいは焼いて食べる……。私たち人間は、そのつど、そうした複数の可能性を前にして、「他のようにもできるのだが、いまはこうする」という仕方で、たった一つの選択肢を選ぶ。生きるということは、ある可能性を選んでそれを現実と化し、それ以外の可能性を非現実へと葬り去ることに他ならない。

［ア］私たちは、日々の営みが滑らかに進んでいるときには、自分がそうした選択をしているということを、あまり意識しない。駅の改札口を通るとき、すれちがいざまに会釈をかわすとき、私たちは、いちいち「他のようにもできるのだが、いまはこうする」などと意識してはいない。しかし、いちいち意識しないで滑らかに行為している、ということは、選択の余地なく自動的に振る舞っているということではない。

もし何ら選択の余地もなく、文字通りに自動的に振る舞っているのなら、「どういう理由で、そうするの？」と問うことは意味をなさないし、問われたとしても答えようもない。しかしし、何も考えずに右から二番目のレジに並んだときでさえ、「なぜ他のレジでなく、あのレジに並んだの？」という問は、完璧に有意味である。

このように私たちは、どこまで意識している・いないにかかわらず、①極限状態を別とすれば、そのつど複数の選択肢の中から、一つを選んで他を捨てることによって生きている。そして、こうした選択は、それが選択であるかぎり、なんらかの選択の基準・比較のcシャクドのもとで行われている。もちろん、比較・選択の基準は唯一ではないし、つねに明瞭に意識されているわけでもない。しかし、「なぜ他のようにでなく、このように？」という問が有意味であるということが示しているように、私たちの選択は、そのつどなんらかの基準のもとでなされている。

このことを物語っているのは、「ああするよりも、こうするほうがいい」という語法が、私たちのコミュニケーションにおいて不可欠だ、という事実である。「こうするほうがいい」と語られるときには、どこまで意識されているか・いないかは別として、なんらかの基準に照らして選択する、ということがなされている。

素粒子やα波の話をすべて抜き去っても、あるいは関ヶ原の合戦やフランス革命の話が封じられても、私たちの日々のコミュニケーションが滞ることはない。しかし、「ああすると・こうするのとでは、こうするのがいい・わるい」という、「いい」の語法が抜き去られたなら、私たち人間のコミュニケーションは、たちどころに滞る。

［イ］、この肝心の「いい・わるい」という語が、すこぶるdタギ的なのである。

「いい・わるい」という語は、気分や天気、あるいは景気、製品・プログラムから、人の行い、人柄、ひいては法律や

その4

制度などなど、あらゆるものごとにかんして用いられる。また、何にかんして言われるのかに応じて、「いい・わるい」という語の適用の基準は異なっている。時計のよしあしが問題になるときの「いい・わるい」の基準は、税制のよしあしや、人柄のよしあしが問題になるときとは、まったく違う。

気分や天気について「いい・わるい」が言われるときには、「快い・不快」というのとほとんど区別できない。幼稚園から帰ってきた子供の顔をみて「なにか、いいこと・わるいことがあったの？」と親が尋ねるとき、そこで言われる「いい・わるい」は、「快くさせる・不快にさせる」という言葉に置き換えうる。

こう考えてくると、景気や製品あるいは人柄や制度にかんしても、「いい・わるい」の判断は、最終的には「人々のニーズを満たして快を与える・与えない」という区別に帰着しうるように思えるかもしれない。じっさい快楽主義と呼ばれる立場に立つ哲学者・倫理学者は、そう考えてきた。たしかに、こうした考え方には一定の説得力はある。人間は、快を求め・不快ないし苦痛を避ける。この ※命題は、否定しがたい。しかし、それだけをもとにして、「いい・わるい」はすべて快苦に帰着する、と主張するのは、［ウ］早計である。

その理由は、こうである。「いい・わるい」はすべて快苦に帰着する、と主張するためには、ひとが、どちらか一方を「よい」選択肢だと選ぶときには、必ずや、その選択肢によってはじめて可能となる快がある、と言わねばならない。しかし、そう断言するのは簡単ではない。［エ］、マザー・テレサは、修道院で瞑想にふけるよりも、路傍に横たわるホームレスの重病人に寄り添うほうがいい、と考えた。もし、「いい・わるい」がすべて快苦に帰着するのなら、彼女がそう選択したのは、瀕死のホームレスに寄り添うほうが彼女にとって快かったからだ、ということになる。

この伝で行けば、ソクラテスが脱獄するより毒杯を仰ぐほうがいい、と考えたのも、そうすることが彼にとって快かったからであり、イエスがエルサレムにとどまって捕縛されるほうがいい、と思ったのも、そうすることが彼にとって快かったからだ、ということになる。これはあまりにもeランボウな話である。

もちろん「快・不快」という言葉の意味を、そのように定義し直すことはできる。つまり、

ある人にとって「快い」ということは、その人が「よい」と思って選んだ、ということを意味する

と新たに定義し直すことはできる。そのように定義し直せば、「いい・わるい」はすべて「快・不快」に帰着する、という主張は、定義し直された「快」の意味からして、論理的に真だ、ということになろう。

しかし、そうした真理は、［X］というのと同様、まったく空虚な真である。のみならず、右のように定義し直された「快」は、②日々のコミュニケーションで用いられている「快」とはまったく異質である。このように、「いい・わるい」という区別を、おしなべて「快・不快」に帰着させることは、容易ではない。

（大庭　健『善と悪―倫理学への招待』より　岩波新書）

※ ニーズ＝必要・要求。
※ 命題＝あることがらについて、「これはこうである」などという判断を言葉で表したもの。

問1 ――線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問2 ［ア］～［エ］にあてはまる言葉を次の中から選び、それぞれその番号を答えなさい。ただし、同じ番号は二度使えません。

1 ところが　2 たとえば　3 すると　4 たしかに　5 やはり

問3 ――線部①「極限状態」とはどのような状態を言っているのですか。その例が記された部分を四十字以内で抜き出しなさい。

問4 ［X］にあてはまる言葉を次の中から選び、その番号を答えなさい。

1 冬の野菜は栄養満点だ
2 地球のまわりを太陽がまわっている
3 独身男には妻はいない
4 ナンバーワンよりオンリーワン
5 ピンチのあとにチャンスあり

問5 ――線部②とありますが、日々のコミュニケーションで用いられている「快」とは、どのような快さのことですか。三十字以内で説明しなさい。（句読点も一字に数えます）

二〇一〇年度　大阪星光学院中学校　入学試験問題

国語　解答用紙

受験番号

問一　(2点×6)

a（まれた）

b（えた）

c

d

e

f

g

問2　(12点)

問3　(6点)

問4　(12点)

問5　(12点)

問6　(6点)

問7　(12点)

二、

問1　(2点×5)

a

b

c

d

e

問2　(3点×4)

ア

イ

ウ

エ

問3　(8点)

問4　(6点)

問5　(10点)

得点